

教育

を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

江 戸時代後期の日本の識字率は、ヨーロッパを含んだ世界の中でも最高水準に位置していたとよく語られる。もちろん正確に何パーセントといった統計数値は残されていない。その識字率を維持したのが、寺子屋であったことに関しても異論はなかろう。

寺 子屋の開設累計は1万5千に及ぶ、という説もある。当時と比べて人口が約5倍の平成18年度(2006年)の小学校数が2万2千8百校であることを考えると、その普及度に驚かざるを得ない(人口に占める子供の比率や、学級数を無視しての話だが)。本書はその寺子屋のありようにひとつの焦点を当てた、学術調査に基づく江戸時代教育論である。

冒 頭に(14頁)「寺子屋の開業にも許認可の手続は不要である」の言葉に「えっ、あのお触れや法令でがんじがらめの江戸時代がそうだったの」と虚を突かれる。そういえば江戸時代には、文部科学省や都道府県学事課などないから、届け出ようもなかったろうな。もちろん教育基本法も学校教育法も学習指導要領もないから、何を教えるか、どう教えるか、誰が教えるかなどは自由であったのだろうか。

ちょっと現今の学習塾や予備校に通ずるところもあると思う。

本 書の読みどころの1つは、識字率を一地域ながら統計的根拠に基づいて探っている箇所だ。安政3年(1856年)2月6日、駿河国駿東郡御宿村(裾野市御宿)で名主の入札(選挙)が、そして翌4年正月11日に百姓代のそれが行われ、そのとき村人が村役人にふさわしい人の名前を書いた投票紙が発見され、それをもとに限定的ながらも識字率が推計される。そもそも江戸時代に、村役人を選ぶ選挙が行われるなどもちろん異例のことであるが、その理由がなかなか面白い。そのくだけは本書をお読みあれ。

さ て識字率のほうだが、名主選挙からの推計では76.2パーセント、百姓代のほうが70パーセントという数字を得る。もちろん投票したのは各家の戸主であることを考えれば、これくらいの数字は当たり前とも取れるが、都市部でなく農村であることを考慮に入れば、なかなかのものだとも取れる。

寺 子屋に関しては農村部では夏秋の農繁期は休みであったことなどの開設時期、入学金・授業料はどの

くらいか、規模はどれくらいか、どんな人物が教えたか、使われた教科書などが詳細に語られる。特に注目したいのは無学年制であったことだ。進度による個別指導が行われていたであろうが、校則により年長者は年少者の面倒をみるのが促されていたらしいことだ。

そ れらを含めて読み書き算盤だけでなく、社会性、徳育を身に付ける場であったようだ。したがって卒業後も師匠と筆子(生徒)の絆は強く、師匠が亡くなったあと筆子中(同窓会)が師匠を偲んで立てた顕彰碑・墓(筆子塚)が全国に万単位で存在するという。感動。

う くと笑ってしまうのは、木版刷りの江戸の私塾・寺子屋の番付である。246名の師匠の名前と場所が載っている。優劣を論ぜずと真ん中に大書きしてあるが、相撲の番付のように上段ほど字が大きい。

本 書はこれらのほか、読みどころ一杯で、江戸時代の教育、躰、文化、社会について興味を持つ人には見過ごすことのできない一冊である。



◀「江戸の教育力」
高橋敏著 ちくま新書692
定価(本体価格680円+税)